

オムニバス形式 の授業の意義

スポーツ科学

地域文化

言語文化

生命科学

行動科学

自然環境科学

社会文化

数理情報科学

人間文化

総合物理

オムニバス形式の授業をとったことがありますか？

複数の先生によって展開される講義は他の講義とは一味違ったものになっています。

では、オムニバスの授業はどのような位置づけにあり、私たちはどう活用すればよいのでしょうか。

今回はさまざまな方面から調べてみました。

企画担当（19生 久保奈津美 中村洋平 20生 山谷義貴）

言語と情報の科学 吉田先生にインタビュー！



総合科学部で開講されているオムニバス形式の授業である「言語と情報の科学」を担当される吉田光演先生にオムニバス形式の授業についてお話を伺いました。

—まず授業の概要についてご紹介いただけますか？
私たちは言語や情報を日常的に使っていますが、それがどんなものかということについてあまり考えたことがないと思います。言語と情報、人工言語といったものがどんな性質を持っているのか、そこにどんな違いがあり、共通性があるのか？コンピューターネットワーク技術は飛躍的に進歩しているけれども、高度情報化社会といわれているものが本当に豊かなコミュニケーションを保証するのか？リテラシー科目のように、ツールとして使い方を覚えるのではなく、人間にとって、現代にとって、重要な意味を持っている言語、情報、両方に絡んでくるメディアといったものを見直すことよって、現代社会における言語と情報のあり方を様々なアプローチから根本的に考えてみよう、というのが趣旨です。

この授業は、十人の先生が担当するオムニバス形式の授業になっています。言語学、情報学、文学、心理学、文化人類学、地理学、科学史など、それぞれの専門的立場から先生が講義を展開するだけではなく、学生のみなさんに考えてもらい、議論しながら理解を深めていきます。

—授業を始めたきっかけは何ですか？

大学院総合科学研究科に、「21世紀科学プロジェクト群」という、プロジェクト型の研究と教育を行う組織があります。その中に「言語と情報研究プロジェクト」があります。このプロジェクトのメンバーが主に授業を担当しています。それ以外にも、地図とイメージ、画像情報など、言語と情報を中心として、それに絡んだようなお話をしていただけのような先生にも授業をお願いしています。実は、平成18年に大学院を作る際に、文系理系を総合した研究と教育の仕組みが必要だということになりました。そこでプロジェクト型研究を行うことになりました。それなら学生も個別専門という枠組みを飛び出して、文系理系をミックスしたような融合的アプローチが取れないかということを議論しました。総合科学部のカリキュラムを見ると、教養教育での領域科目・基盤科目は、哲学、文化人類学、物理学、化学、生物学というように、それぞれのプログラムの基礎科目のような講義が並んで、「総合科学」という全体に関連する基礎科目がほとんどあります。それでは総合科学の名が廃るのでは—ということとで、これからは学部生が全体として履修する基礎的な領域科目が必要だ、これは、各プログラムの枠を越えたところでやる必要があるのではないか。そこで、各プロジェクトを中心に教養の授業を提供しようということになりました。最初は、まったく新しい内容の試みですので、大変だなあという感覚もありましたが、実際にやってみると、私たち教員の

ほうにも刺激的な内容になっていっていると思います。

—先生の講義の順番はどうやって決めていらっしゃるのでしょうか？

講義の順番は原理的なもの、それから応用の順にしています。この授業はリテラシー：つまり言語をどう使うのかではなく、まず、人間の言葉とはどういうものか、情報とはどういうものかを考えます。そこから、言語にかかわるメディアや技術史、コンピュータにかかわる人工知能や外国語教育への応用、さらに、それ以外のバリアフリーや、画像情報などに広げていくといったアプローチをとっています。

—講義を関連付けるために先生方をお願いしていることはありますか？

授業を最初にする前に、どのような講義内容でやるかはメールでやり取りをして、お互いに関連性を持たせています。講義の関連性は、WebCTなどを使って把握しています。しかし、各担当者がまったくスムーズに連携しているわけではないというところが、欠点でもあり、面白い点でもあると思います。思いがけない発見や、ずれが生じたりします。それは非常に新鮮な驚きを私たちにも与えてくれます。

—先ほど少しお話になりましたが、オムニバス形式の長所・短所はどういったところでしょうか？

私もなるべく授業を聞くようにしていますが、担当の先生方はみな、言語や情報についてよく考えていらっしやって、言語学、心理学、情報学、文学、社会科学など、互いの専門性を生かしながら、関わっていきけるのがよい点です。一人の先生が講義すると特定の分野での深みは出ますが、講義できる分野に限界があります。しかし、先生の講義を繋ぎ合

わせていくと、学生のみなさんはまた違う見方から深い知識を得られると思います。そういう点で、オムニバスというものは非常にメリットがあると思います。また、オムニバスの授業によって新鮮な見方というものが生まれて、そこからもう一度考え直していくことができます。教養の授業というのは、その授業の内容が深い問いかけを提起して、興味を持ったことに対して学生がさらに調べてみたいという刺激を与えられることが大切だと思います。

デメリットは、この授業ではどこまで深まったんだろうということ、また、これから何を考えたらいいのだろうかという、最後のまとめの部分が難しいですね。それから、トピック毎に異なる知識が必要なる場合が多いので、うまく前の講義と次の講義が繋がっていないと深い溝ができてしまいます。

—先生が学生に求めることを教えてください。

総合科学ということで、様々な問題について好奇心を持って探求していくということが大切だろうと思います。自分にはこれしかないという思い込みで勉強するのではなく、本当にそれでいいのかということを考えてみましょう。問題のメリット・デメリットというものについて、深く追求するというアプローチができたなら、その中で面白いと思ったことを立ち止まって深く追求していく姿勢が大事です。図書館で本を読んだり、情報検索したりして、自分の頭や、本と格闘したりして、ぜひ深く追求してほしいと思います。今は昔と違って膨大な数の情報が溢れていて、なんだか分かったつもりになります。それが過ぎ去った時にはすぐに忘れ去られてしまいます。この授業は理系文系両方の学生さんが参加してくれていますが、WebCTの掲示板でのみなさんの感想や感じ方というものを私は非常に高く評価しています。しかし、そこからもう一歩踏み込んで、面白いな、と思ったことについて、その先生

に聞いてみたり、本を読んだりすることが大切なんじゃないかなと思います。

—昨年この授業を受けて、言語はとても中間的な領域にあると感じました。

まさにそのとおりです(笑)。言葉というものは身近なものです。言語は最大の謎のひとつで、それに向かつて様々な領域からアプローチされています。確かに、文学作品は理系的な感覚ではとらえられない面があるのかもしれませんが、ヒトが進化の過程でいかに言語を獲得したのか、子供が短い期間にどのように言葉を学習するか、なぜ大人には外国語学習は難しいか、といった問題は、文系・理系両方の問題だと思います。そういう意味で、言語と情報科学はまさに総合科学的な授業だと思っています。

—今後のオムニバス形式の授業はどうしていけばよいと思いますか？

オムニバス形式の授業はもっと増やしたほうがいいと思います。先ほども言ったように、総合科学の基礎科目というものが、それぞれの専門の基礎科目のようなものだけで終わってしまったてはいけないと思います。プログラムを超えた、文系と理系、あるいは文系の中の二つのプログラムといったような、学際的な授業をすることで、学生だけでなく、私たち教員にもよい刺激になると思います。総合科学とは何かという問いかけに対して、答えられるような科目がもっと増えるといいですね。

—今後「言語と情報の科学」の授業でやっていきたいことはありますか？

私は「言語と情報」をキーワードにすれば、かなりの先生がアプローチできると思っています。生命科学の遺伝子や物理学の量子コンピュータなど、情

報にかかわる部分も多い。この授業は、現代をとらえる大きな視点を提供していくことができると思っています。「教養はつまらない」というような感覚がみなさんの中にあるかもしれませんが、そうじゃないということ発信していけると良いですね。

パッケージ別科目に「知の根源を問う」というパッケージがあり、副読本も作られています。これは私たちの理念と近いです。これを見るとやはり、数理情報、心理学、歴史学、生命科学、スポーツ科学などもあります。こういう形で各分野が関連性を持って展開している例を見ると、心強いです。

—吉田先生は「文理融合リサーチマネージャー」というものに関わっていますか？

これは、文部科学省の大学院教育改革支援プログラムとして総合科学研究科が採択された大学院生向け教育プログラムで、多くの院生が参加しています。講演会やセミナーは公開でやっていますので、みなさんもぜひ参加してください。言語と情報研究プロジェクトも国際的に有名な研究者を招待してセミナーを開催したり、大学院生に発表してもらったりして、議論を行っています。他にもリスク研究、文明と自然研究、資源エネルギー研究プロジェクト、平和科学研究プロジェクトを立ち上げています。世界はとて複雑な形になってきています。だから自分の専門分野を深めつつも、異分野の人々とコミュニケーションできる能力、そして、新しい複合的なプロジェクトを進められるような企画立案能力を身につけてほしい、というまさに文理融合のコンセプトなのです。研究倫理などの興味深い授業も開いています。学部生の方にも参加してもらえればもっと総合科学部の良さを判ってもらえらると思います。

(取材・記事 19生 中村 洋平)

前のページでは「言語と情報の科学」の講義を統括されている吉田光演先生にお話を伺いました。並行して、毎回の授業を担当される先生方にも、授業概要や、授業に関わってみて感じていることをお聞きしました。それぞれの先生方が、どのような思いで授業を担当されているのか。引き続き、必読です！

言語と世界のモデル化

(中村 純 先生)

●授業概要

言語は、情報を伝える道具であるが、また思考を表現する道具でもある。ただし、思考が言語とまったく独立に存在しているわけではない。また思考自身の要素として情報は大きな役割を果たしている。このように「言語」「思考」「情報」は互いに密接に結びついている。このことはおそらく人類が遙か昔から気がつき、宗教者、哲学者、言語学者たちが考え続けてきた。計算機言語は、状況が単純化されているため、言語の役割と意味を考える一つの場となっており、言語学と互いに影響を及ぼし合っている。

情報を伝える際には、必ず「世界のモデル化」という作業が介入する。自分たちで何かを伝えてみてこのことに気がつく。

●「言語と情報の科学」の授業全体の中の位置づけ

授業の初めの方で、言語の意味、情報の意味を考えてもらう。

●この授業で目指すこと

自分自身が、学生時代から言語とは何か……例えば「リンゴ」という言葉が無かったときに、世界中のリンゴを表すことは可能なのかと考える。続けて、未だに分からない。この分からなさを共有してもらおう。

●オムニバス形式の授業に関わってみて感じること

一回の授業に全力を投入できる（野球で九人の投手が一イニングだけ投げればすごい球を投げられる）。WebCTなどの学生の書き込みで、皆が考えていることが分かって、その後それを反映させられないのが少し残念。

ことばを科学する…音声言語に見られる最小労力化現象

(安仁屋 宗正 先生)

●授業概要

自然界にごく自然に見られる最小労力化の現象が人間の話すことばにもみられることを、科学するうえでよく使われる方法である観察、分析、類推、実験で証明してゆきます。英語のカジュアルスピーチにおいて観察された事実をもとにして「英語のカジュアルスピーチにおいてt音とd音が弾音化するならば、n音も弾音化する」という推論を立てて、これが自然で妥当であることを理論的に証明して、さらに音声分析ソフトやナゾメータを使用した実験で実証してゆきます。以下の項目について焦点を絞って説明し、パワーポイントを使用して順序よく具体的に例を示しながら説明してゆきます。

1. 英語のt音は弾音の「音と入れ替わる
 2. 英語のd音も弾音の「音と入れ替わる
 3. 英語のn音も弾音の「音（鼻音化した弾音）と入れ替わるにちがいない
 4. 理論的証明
 5. 実験による証明
- 結びとして講義内容をまとめる。その後、受講者に意見やコメントを書いてもらう。

●「言語と情報の科学」の授業全体の中の位置づけ

人間にとって、重要な意味をもつ言語の役割を見直し、自然界として人間の活動においてごく自然である最小労力化の現象が音声言語も見られることを考察する。

●この授業で目指すこと

私自身が考え、現在行っている総合科学とは「研究分野の領域横断を実行して、知見を総合し、しかも統合的にものを考える」です。その一環として、現在考究中の研究テーマについてわかりやすく説明することを目指しています。

●オムニバス形式の授業に関わってみて感じること

教える側から見ると通常の授業とは異なり、一回のみの授業担当であるので精神的にも肉体的にも楽である。これはなかなか難しいことであるが、担当している他の教員と意見交換が密になればよいかなと思うことがあります。受講する学生の側では、様々な研究方法や研究テーマにふれ、考察し、自分自身が考える総合科学とは何か問い続けて、自分自身の総合科学をみつつけて実行することを望みます。

音読から黙読へ

(平手 友彦 先生)

●授業概要

私たちは特別な場合を除いて本を黙読します。しかし、今から一〇〇年ぐらい前までのヨーロッパでは多くの場合音読されていました。音読から黙読への変化はかなりの長い時間をかけて移行したようですが、中世のある時期（七から九世紀頃）のテキストの有り様を分析するとその変化が分かります。それまではテキストを書き写す場合、大文字ばかりで小文字や句読点がありませんでした。何よりもテキストは「連続記法」で書かれていて、語と語の間にもパラグラフの切れ目にも一切の分離がなかったのです。この音読から黙読への移行によってどんな変化が読者にもたらされたのでしょうか。講義では具体的な文献を見ながらこの読書の変化を考えていきます。

●「言語と情報の科学」の授業全体の中での位置づけ

この講義は言語そのものでもなく、また情報でもなく、言語情報を運ぶ「支え」（本など）の考察となります。

●オムニバス形式の授業に関わってみて感じること

一回のみの講義なのでどうしても情報提供が過剰になりがちです。ポイントを絞り、討論の時間も作りたいのですがなかなかうまくいきません。せっかく多くの専門家が異なる視点で講義を行うのですから、初回か最後の講義では担当教員が一堂に会して「討論」するのも面白いと考えています。

言語情報のバリアフリー化

(佐野 眞理子 先生)

●授業概要

大学の授業では、教員の講義の他、板書や、パワーポイント、ビデオといった視聴覚教材等が使用され、授業内容が伝達される。そこには、数えきれないほどの文字情報、音声情報、視覚情報、触覚情報が含まれている。では、もし、視覚や聴覚に障害のある人が受講していたらどうだろう。また、座っている場所や、周りの環境によっても、「見えにくい」「聞こえにくい」といった状況は発生する。つまり、発信されている情報が、受講者に一様に受信されているとは限らないのである。

本講義では、聴覚障害や視覚障害の疑似体験を通して、「見えない・見えにくい」「聞こえない・聞こえにくい」状況を体験し、いかに授業情報が伝達されていないかというのを体験してもらおう。次に、要約筆記、音声認識ソフト、拡大機能、読み上げソフトなどを用いて、「音声情報を文字情報」に、あるいは、「文字情報を音声情報」に変換して伝える代替コミュニケーションを学ぶ。最後に「わかりやすい授業」とは何かという問題を通して、情報のバリアフリー化について考える。

●「言語と情報の科学」の授業全体の中での位置づけ

高度情報化社会は様々な便利さを私たちにもたらした。私たちの日常生活では、たくさん情報が溢れている。しかし、その情報は伝わって、初めて意味を持つものである。しかしその情報は、すべての人に一様には伝わっていない。この授業では、情報が伝わらない状況を体験し、そして、伝える工夫を考える。

●この授業で目指すこと

おそらく受講生の皆さんは、「見えること」「聞こえること」は当たり前のこととして生活していることでしょう。その当たり前と思っていることが、遮断される経験を通して、情報は、すべての人に同じように伝わっていないという事に気がつくと同時に、情報のバリアフリー化の大切さを知ってもらいたい。そして、「わかりやすい」情報の発信に心がけてほしい。

●オムニバス形式の授業に関わってみて感じること

オムニバス形式の授業の学生にとつてのメリットは、いろいろな先生の講義を聞くことができ、幅広い視野が養われることだと思います。担当する立場から言うと、難しいです。一回の授業で話せる内容は限られてくるので、あまり、深い話ができません。できれば、数人の担当者が、数回ずつ受け持つという方法がよいかもしれません。

情報化を支える技術

(市川 浩 先生)

●授業概要

「情報化をささえる技術」と題し、おもにIC、LSIの原理、歴史、その問題点（ハイテク汚染）について解説しております。

●「言語と情報の科学」の授業全体の中の位置づけ

「情報化」と言われる社会現象を理解するうえで基本的なハードに関する知識を与えるものと考えております。

●この授業で目指すこと

受講生に、初歩的であっても、正確な知識を身につけてもらうことです。

●オムニバス形式の授業に関わってみて感じること

こうした形式の授業の運営は至難のわざです。「すべての講義内容にたいする理解が単位取得に必要である」という仕組みができていない限り、受講生の授業を受けるモチベーションが維持できないからです。率直に言って、受講生のやる気のない態度にときに気分を害しております。

中国の文字改革について

(小川 泰生 先生)

●授業概要

中国の漢字は三〇〇〇年以上の歴史があり、漢字の総数は五〇〇〇〇字以上ある。魯迅が「漢字が減じるか、民族が減じるか」と言ったように、英語などアルファベットを用いた表音文字に比べると、漢字を覚える労力は大変である。漢字を学ぶには莫大な時間と金が必要であり、これまで漢字、文化が一部の特権階級に独占されていたという反省から、中華人民共和国成立後漢字が簡略化されている。台湾では従来通りの繁体字を用いている。日本でも一部簡略化しているが、「國(台湾)、国(中国)、国(日本)」、「臺、台」、「態、态」、「國(台湾)、国(中国)、国(日本)」、「權、权」、「從、从」、「壞、坏」、「歸、归、帰」と台湾、中国、日本のすべてが異なるものもある。授業では、中国でどのような理念から、どのように簡略化した漢字を制定してきたのか、日本や伝統を重んじる立場から繁体字を使い続けている台湾とも比較しながら、中国の文字改革について考える。

また、英語はアルファベット二六文字で表記できるので、簡単にタイプライターで打てるが、日本語は漢字で表記しないといけないので、以前は和文タイプライターを用いており、英語に比べて、大変不便だった。日本語は情報化社会にとって致命的な欠陥を持つと思われていたが、技術の進歩により、今では簡単にパソコンで日本語を打てるようになった。中国語でも同様に簡単に打てるようになっていく。中国語の入力方法について、中国にはピンイン(中国語のアルファベット表記)を用いる日本と異なる方法があり、それについても考える。

●「言語と情報の科学」の授業全体の中の位置づけ

中国の文字改革を通して、社会における言語と情報のあり方を考えていく。

●この授業で目指すこと

受講生に文字の簡略化が文化全般にもたらす功罪について考えてもらう。

●オムニバス形式の授業に関わってみて感じること

まだ授業は終わっていないのだが、企画立案者の役割が大切だと思う。

私たちは今回、「オムニバス形式の授業の意義」の記事を書くに当たり、学生の皆さんへのアンケート調査を行いました。ご協力くださった皆さま、誠にありがとうございました。

この調査は、二つの質問から構成されています。始めに、オムニバス形式の授業に対する率直な感想を聞きました。

質問「オムニバス形式の授業についてどう思いますか？」

この質問への回答から、オムニバス形式の授業の良い点、悪い点の両方を考えることができます。良い点に関する回答としては

- ・ 毎回の授業で様々な内容の話を聞ける
- ・ 様々な先生に出会うことができる
- ・ 幅広い知識や、多面的な視野を養うことができる
- ・ 教授一人あたりの負担を減らせる

というものがありません。やはり、色々な先生や学問との出会いができることが、普通の授業にはない最大の長所であるようです。

一方、悪い点に関する回答としては

- ・ 前回の授業のフィードバックをしにくい
- ・ 授業全体を通しての一貫性が薄くなる
- ・ 先生がすぐに替わることで、専門的な授業が難しくなる

などが挙げられていました。

それでは、悪い点をどのように改善していけばよいのでしょうか。これについても、意見を求めました。

質問「オムニバス形式の授業について改善してほしい点などがありましたら、自由に記述してください。」

この質問に対しては、

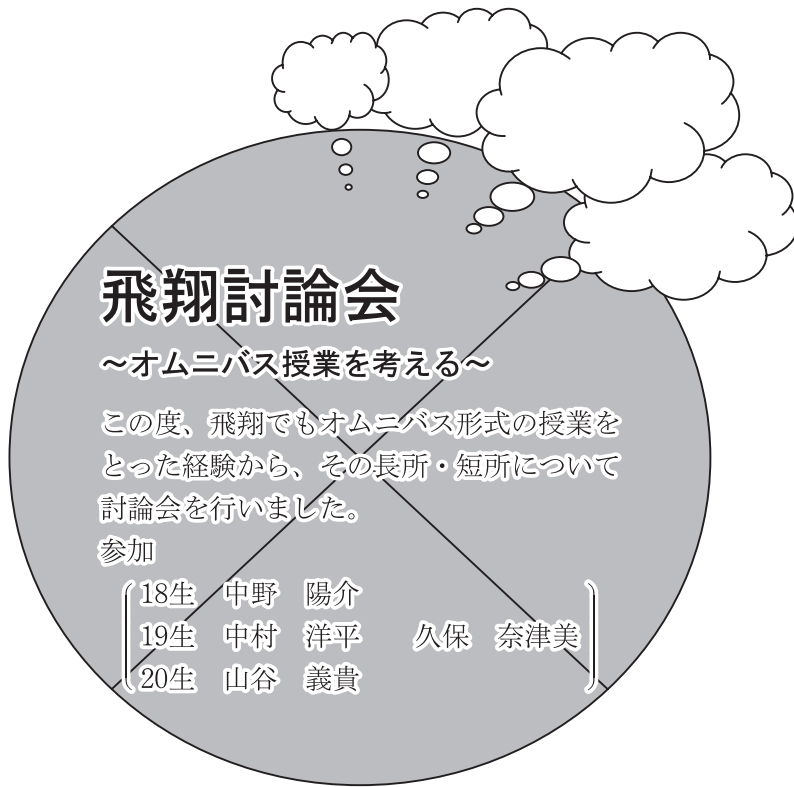
- ・ 前回の授業の先生に気軽に質問ができる機会を設けてほしい
(各回ごとのBBSを作るなど)
- ・ 成績は、期末試験ではなくレポートで付けてほしい
- ・ レポートの多さをどうにかしてほしい
- ・ 担当の先生の間で、綿密な連携をしてほしい

といった回答がありました。

期末試験ではなくレポートで成績を付けてほしいと思う学生がいる一方、課されるレポートの多さに戸惑っている学生もいるようです。

前のページで「言語と情報の科学」を担当される先生方の声を取り上げましたが、この調査を通じて、先生方も学生たちも、オムニバス形式の授業のあり方に様々な悩みを抱えているという現実が浮き彫りになりました。

(記事担当 20生 山谷 義貴)



中村 まずオムニバス形式の順番についてどう思います？

中野 「水の総合科学」の授業ではやっぱり文系と理系にわかれたよ。

それで、前半はわりと理系チックで、中盤で生活の中の水道局の方とか来てくださったりとか、後半では文化人類学の中の水道局の役割とか、絵画の中での水の役割と言う風になっていて、一応文系理系を行ったり来たりしなかったから順番はちゃんと決まっていたのかなあとは思ったけど。

中村 吉田先生に聞いた話でも、一応基本から応用になるようにしてい

ると仰っていました。理系文系といえ、なんだか理系ってオムニバスにするのが難しいかなあと思います。総合科学をやるうって言うこと自体がなんだか文系的な営みな気がするんですよ。

「学問とのであい」の授業はどうでした？

久保 あの授業は順番はごちゃ混ぜだった気がする。文学部は三国志の歴史だったし、医学部はワクチンの話だったよ。あとは、それを学生が習っているものとして話す先生もいて、配慮が足りないように感じたかな。わかるように教えてくれた先生もいたけどね。一般教養としてならそれでも良いかもしれないけれど、専門科目としての総合科学ってものを考えたときにどうしたら良いと思います？

久保 「学問とのであい」の中だと、自分がどうしてそれを研究したかと言う話が一番総合科学ぽかったかも。

中村 なるほど。では次にオムニバス形式の授業の長所短所について考えたいと思います。教えている授業が完璧に専門と重なっていない場合もありえると思うんですよ。そういう場合は専門に近いところだけ教えれば良いのでよいと思うのですが。

山谷 総科の授業じゃないんですけど、文学部の「地理・考古・文化財の世界」というのを受けていて、その中で特に地理の話聞きたいなと思ってとったのですが、他の話も面白くて、先生との出会いと言うのもあると思います。自分が思ってた分野に関心が向けられるという長所があるような気がしますね。

久保 たまに、これが一番面白くないだろうなあ、と言うのが一番面白かったりするよね。

中野 確かに……別に受けたくなくても受けるもんね(笑)。知らない世界を知るチャンスになるよね。

中村 短所としては、やっぱり内容が浅いですよね。

中野 それは仕方がない。やっぱりオムニバスの授業をとる人は、その概論をつかむためにとるのがベストなんじゃないかなあと思う。

中村 学問としての総合科学があっても良いかなあとは思いますが。でも、オムニバスで面白そうな先生を見つけたら、その次のセメスターでその先生の専門の授業をとったりとかして、そこで詳しくやればよいと思うよ。

中村 ひとつの専門分野の中でのオムニバスになると、総合科学からは少しずれるかな、とも思うのですが。

中野 ひとつの専門分野の中でも充分に幅の広いことをやっていて、他の学部よりもそれだけで充分ひろいことが出来ると思うよ。と言うか、ひとつの授業で総合科学全部をみようと言うのは無理だと思う。やっぱり全部見たければ莫大な時間が欲しいから、全部の授業をとらないといけないんじゃないかな？

久保 でも、オムニバスの授業では他の先生と繋がる場所も出してくれるから、応用は出来るよね。

中野 だから、知るチャンスになるよね。

中村 他にデメリットといえば…。

中野 やっぱり前の先生との連携がうまくとれないことかな。質問がその授業時間内じゃないと出来ないことがよくないよね。授業自体が全然わからないときもあるし。一個前と繋がってないときとかは特にわからなかったな。

中村 まとめが難しいと吉田先生は仰っていました。それから最後に学生にこれからの課題を与えることが難しいと言っていました。

久保 最後に全部を通して考えたっていう課題があっても良いかなと思うよね。レポートは先生の課題の中からどれかを選んで書くと言

うものだったから。だから、その中からふたつぐらい選んで、それを関連付けて書くと言うのがあっても言いのかなとは思いますが。

中野 パッケージ科目がそうだったよね。パッケージ科目の関係から感じたことを書くことがあったけど…まあ、難しかったよ。もっと近い分野同士ならやりやすいのかもしれないけれど。

中村 それは僕もありました。だから、オムニバスはやりやすいはずなのにひとつの分野でレポートやるから。

中野 なんだからもったいないよね。なんだかんだ言って、いろんなところで分野同士が繋がっているよね。実際にどういう風な研究の調査をやっているかというのをオムニバスでやっても面白いかもね。

中村 「学問とのであい」とかそういうイメージだけど、違うの？
久保 教育学部の先生が唯一、いろんな社会問題とかを取り上げて生徒に考えさせた授業で、面白かったよ。そういえば、なんだかそう言う繋がりがマップみたいなのを何かの機会にもらった気がするよ。

中野 それはシラバスを見ても分かるよね。専門として認定されるプログラムの科目を見れば分かるよ。ふたつのプログラムで認定される科目とかがあるよね。

中村 最後に改善したほうがよいことかありますか？

中野 全体の目的と各講義の目的をそれぞれ最初に言って欲しいかな。そうですね。

総 評

私は以前からオムニバス形式の授業について、その意義を聞いた
い！と、強く感じていました。オムニバスの授業は、その講義名が魅
力的です。そして講義名は直接その講義で取り扱うことでもあるはず
です。実際、講義名だけで履修を決めている学生もいるのではないで
しょうか。そして、そのテーマはとても総合科学的であるように感じ
ます。多くの先生が授業を行ってくれるため、分野の垣根を飛び越え
たお話しが聞けます。しかし、実際にこれまで受けたいくつかの授業
では、一回ずつが独立した講義のように感じられたり、受け手の実力
不足のためかもしれません、伝えなかったことが分からなかったこ
とがありました。

そこで今回は「言語と情報の科学」という、教養教育の科目を取り
上げて、オムニバス形式の意義を探ろうと考えました。

まずは、吉田先生にお話を伺いました。オムニバス形式の授業が始
まった経緯などを知る中で、やはり「総合科学」というものが立ち現
れてきました。先生の『総合科学』の教養科目がないですよ」とい
う言葉には思わず納得させられました。広島大学の総合科学部に入学
してから今までも、ことあるごとに『総合科学』とは何か、という問
題を考えてきましたが、オムニバス形式の授業、それから、吉田先生
のお話の中で出てきたパッケージ科目、総科の大学院の21世紀科学プ

ロジェクト群などの中に、そのヒントがあるように感じました。

「言語と情報の科学」の書く講義を担当されている先生方にお願
いしたアンケートでは、特に「オムニバス形式の授業に関わってみて感
じること」の回答が印象に残りました。先生方が常に試行錯誤されて
いる姿が垣間見えた気がしました。また、学生にしたアンケートや、
討論会からはオムニバスの授業に対する学生の取り組み方が感じられ
ました。オムニバスの授業を新しい分野としての出会いの場として利
用する、という考え方は自分の中にはなかったので新鮮でした。

今後の課題としては質問する機会を作っていくことや、単位認定を
するための試験やレポートの形式などについて考えていく必要がある
と思います。

(記事担当 19生 中村 洋平)